LITERARY COSMOS
愛媛県立医療技術大学図書館報　第２号　　2006.3.31
伊予郡砥部町高尾田 543 番地（〒791-2101）
電話･FAX　089-960-0061
ホームページ　http://www.epu.ac.jp/tosyokan/

図書委員会活動報告

図書館長　　門田　成治

平成 16 年春の４年制大学開学から今日までの２年間、図書委員会（委員６名）は図書館職員と共に、図書館資料の充実とサービスの拡充に取り組んだ。以下、その主な活動の内容を報告する。

---

①選書について

選書は委員会活動の重要なものの１つである。言及するまでもなく図書館の資料（図書や雑誌を含む）は正に本学学生や教職員の知的原動力となるものであり、最新の教育および研究に有益な情報を提供することが、本学図書館の資料購入の基本的な考え方である。短大時代の選書の方針を引き継ぎ、その種類として基幹図書（視聴覚資料を含む）、共通図書、講座推薦図書を設けた。基幹図書は辞典等の基幹となり高額なもの、共通図書は学生と非常勤講師により推薦されるもの、講座推薦図書は各講座より推薦される図書である。これらの推薦されたものからの選書は隔月で年 ４回行った。図書委員が中心になり、所属学科及び各講座へ計画的な選書を図ってきた。

②地域開放への取り組み

蔵書の特質を活かして、短大時代より県内の医療従事者に開放している。さらに県内の医療及び福祉系専門学校・専修学校、高等学校の生徒及び教職員に図書貸し出し枠を広げた。しかし、利用率は予想外に低いのが現状である。時勢からは一般県民にまで拡大するのが望ましいと思われるが、受け入れ体制の整備等の検討が必要になると思われる。

③文献システム、電子ジャーナルの充実

医学中央雑誌 Web 版や JDream に加え、文献検索システム・CINAHL、電子ジャーナル・PRONAS を導入した。一昨年前の４年制大学準備の図書プロジェクトにおいて、看護系大学で常設されている文献検索システム・CINAHL をはじめ、数種の電子ジャーナルの予算要求をしたが、県財政の事情により見送られていた。昨年度、事務局の支援を受け、図書館予算内のやりくりでこれらの導入が実現した。

④本学紀要の公開

平成 17 年４月、紀要委員会の協力の下、紀要を PDF 化して本学ホームページで公開し、国立情報学研究所のデータベース･紀要ポータルへ登録した。その維持管理を図書館が担うことにした。本学の研究成果の公開という点で他大学と歩調を揃えることになった。

図書委員会活動報告

⑤国立情報学研究所の ILL（inter　library loan）文献複写等料金相殺サービスへの加入。

このサービスは国立情報学研究所が行っているもので、平成 17 年 4 月時点、国立大学図書館はすべて（113 機関）、私立大学図書館は大半（346 機関）がこれに加入していたが、公立大学図書館は約半数（44機関）の加入状況であった。公立大学の場合、大学が国立情報学研究所に文献複写費の債権譲渡をする必要があり、地方自治法との関係で加入が遅れていた。本学事務局の協力を得て本学図書館も平成 17 年 4 月からこのサービスに加入した。

⑥県立図書館と共催で「ブックトーク＆メディカルトーク」の事業を開催

平成 17 年 11 月、松山市立西中学校に於いて中学３年生を対象とした「ブックトーク＆メディカルトーク」なる講演会を開催した。この事業は県立図書館と連携・協力して起こしたもので、ブックトークは県立図書館の司書、メディカルトークは本学看護学科教員が担当した。なお、事務的業務は事業の提案者である県立図書館側が行った。平成 18 年２月、県立伊予高校に於いて高校 2 年生を対象として同一内容の講演会を開催した。

⑦図書館報の発行

平成 16 年、短大図書館の時代から発行されている図書館報を継続し、大学図書館としての創刊号を刊行した。内容は図書館の利用および活動の紹介、書評、随筆、図書館利用統計等で、年度ごとに１回の発行とした。

以上が、主な活動内容である。最後に、本学図書館は医療、特に看護系の資料が豊富でよく整備されていると評価されている。学外利用者では看護関係者の利用率が極めて高い。今後、より一層、看護や医療に関する資料の充実を図り、地域を代表する医療看護系図書館という特色を濃くしていくべきであろう。

（かどた　せいじ）

◆――――――――――――――――――――――――――――――――◆

平成 16 年４月～平成 18 年３月　図書委員会メンバー

- 委員　門田成治、関谷由香里、加藤徳雄、伊藤晃、浅野光、河野雅弘（平成 17 年度）
  三好清徳、奥田美恵、近藤章文（平成 16 年度）
- 図書館司書　水野千恵子、白石直美
- 事務局　松本光代（平成 17 年度）、源田裕久（平成 16 年度）

◆――――――――――――――――――――――――――――――――◆

【エッセイ】

本から学んだあれこれ

看護学科　教授　　村井　静子

本を読むのは好きなほうであるが、本の読み方にもいろいろあると思う。ここ数年は肩の張らない小説などを手にすることが多いが、作中の人物や情景に想像力を働かせてくれる文章に出会うと、読後に充実感が広がり楽しいものである。楽しむためでなく丁寧に本に向かうのは仕事に関する分野の専門書は勿論であるが、関連すると思われる他分野の専門書などにあたるときである。看護者として基盤となる人を理解することを探求した時期には、書かれていることの意味を厳密に理解するため、広辞苑、哲学辞典、心理学事典、社会学事典などの辞書にあたったりしながら、1～2行の文章に何時間もかけたものである。看護は人間を対象としており、相手を理解することは基本的なことである。その当時、「人をわかる」とはどのようなことなのか、知識としてではなく実践科学としての看護を実践する者として実感としてわかることを追求していたのである。当時師事していた先生から紹介された専門書、メルロ・ポンティ著『目と精神』みすず書房、市川浩著『精神としての身体』頸草書房などを読み始めた。身体性への理解であった。人間誰にも共通な肉体としての身体ではなく、人は身体を生きているということ、つまり人はそこにいることで相互に関係しあっているということである。また、人は<もの>としてではなく、"こと>として生きていることについては、木村敏著『時間と自己』岩波新書などから学んだ。さらに、人は社会を構成する個人であるとともに、その社会によって人間化されることについてはKC・クワント著『人間と社会の現象学』頸草書房、中村雄二郎著『共通感覚論』岩波選書などから学んだ。

看護の対象である患者さんという相手を理解することは、その人の属性（性別、年齢、職業、性格など）を知ることだけではなく、今対面している身体として存在している患者―看護者の関係で相互に起こっていることを捉えることである。それは現象学的アプローチであり、看護者としての知識を元にした常識的な行動を起こす判断と同時に起こっている関係性、つまり相手を受け止めている感性に気づくことである。

１０年程師事した先生の教えを受けながら本から学んできた。そして当時から現在まで看護現場や看護学教育の中で経験を重ねてきている。今の私自身は読む本も分野が広がり、経験で出会ったさまざまな出来事などから変化してきているが、生き方や人間理解の基盤は現象学を土台にしているといえる。いま、相手に向かうとき「その人らしく」あって欲しいと思っている。対面しているその人が自然でいられること、それを感じ取ることが出来るようにと心懸けている。最近読んだ本で『博士の愛した数式』（小川洋子著、新潮文庫）という小説がある。事故の後遺症で８０分しか記憶が続かない６０歳代男性の数学博士が主人公である。その博士は数字が人との関係を結ぶ手段という変わった人物設定である。

「その人らしさ」を形成する現在の自分につながる記憶を失うこと、今という時の連続性が８０分しか続かないこととはどのような世界なのだろうか。人が自己の存在を実感できない、また過去の記憶を失っている状況は大きな恐怖であろうと思う。目の前にいる相手に無理なくその人らしさでいてもらえることの積み重ねなのであろうか。

人のさまざまな生き方に出会う看護者として、出来るだけ多くの生き方を知るためにも本とのつきあいは大切と感じている。

（むらい　しずこ）

私の薦める一冊の本

「真帆ーあなたが娘でよかったー」
内梨昌代・真帆著
ウインかもがわ出版　2005 年

看護学科 教授　　中西　純子

突然，一本の電話がかかってきた。「もしもし，内梨ですけど，わかりますか？」「えっ？」あまりに唐突な出来事だったので，一瞬私の頭の中は（内梨？誰？誰？誰？）と？マークだらけになった。戸惑う私に彼女は旧姓を告げた。そういえば，聞き覚えのある独特のその声。電話は 20 年ぶりにかかってきた大学時代の同級生からだった。用件は長く闘病していた娘が亡くなって，闘病記を出版することになったので看護学生さんにも是非読んで欲しいというものであった。

彼女の娘が脳腫瘍で手術を受けたという話は風の便りに聞いていた。お悔やみを言いつつ，私は「娘さんはいくつになられてたの？」と聞いた。すると，「20 歳。医学部を受験しようと頑張ってたんだけどね。」という返事を聞いてびっくりした。娘が脳腫瘍という話を聞いたその時の娘は確か小学生だった。脳腫瘍という病名を聞いて，正直，予後は厳しいものと予想していた。現に，発病当時，医師からは余命 1 年と家族は宣告を受けていたらしい。それから 20 歳までの 8 年間。彼女の愛娘である真帆ちゃんは 20 回にもおよぶ手術と放射線療法，化学療法を繰り返しながら，医師になる希望を決してあきらめず，多くの人々に勇気と感動を与え続けた。この本は，その 8 年間の彼女の生き様を前半は本人自身の執筆で，病気が進行した後半は母親がその遺志を受け継いで完成させた闘病記である。掲載してある真帆ちゃんの病歴を見ると，そのあまりの壮絶さに思わず「うそでしょう！？」と絶句してしまう。彼女の脳腫瘍は多発性に何度も再発を繰り返す悪性度の高いもので，しかも，腫瘍増殖の勢いが強く 1 ヶ月ごとの定期画像診断でも早期発見が難しく，あっという間に致命的な大きさに増殖してしまい緊急手術でようやく一命をとりとめることも何回かあった。病気の進行と治療の経過だけを見れば，「壮絶」という言葉以外に表現する言葉は見つからない。過剰演出といわれるほどの泣かせるドラマでもここまでの脚本はないだろうと思わせるほど病魔は深刻だった。しかし，彼女の生き様はその重い現実とは全く逆に，常に自然体で前向きな明るさと意志力の強さ，病気によって得られたかけがえのない人々との出会いへの感謝に満ちていた。そして，彼女に関わった多くの人々もまた彼女によって生かされ「ありがとう」と感謝の気持ちを述べている。

私は，この本を同級生の母子が書いた本だから，あるいは，真帆ちゃんの生き様があまりにも見事だからここに紹介しようとしているわけではない。私は，読み始めた当初，真帆ちゃんは“特別な子”としてある使命を受け天から使わされた子ではなかったろうかと思った。しかし，読み進めるうちに，そうではないと考えるようになった。これは，真帆ちゃんという個人の単なる闘病の記録ではなく，‘人は逆境にあるときにもどのようにして充実した生を生きていけるのか’という根源的で普遍的な問いを私たちに投げかけてくれるものだと気が付いた。「あの人は特別よ」「あの人は恵まれていたのよ」と自分とは違うと特別視してしまうことは簡単だ。でも，それは違うと改めて思う。医療者でさえ息を呑むほどの過酷な病気との闘いの日々を終え，彼女が最期に残したメッセージの中に「幸せだった。」という言葉がある。おそらく誰もが最期の時には，そう言って自分の一生を終えたいと願っているだろう。この本はそのための生き方を教えてくれます。そして，自分が今，生きている意味を改めて考えさせてくれる本です。

（なかにし　じゅんこ）

私の薦める一冊の本

「ドキュメント 検証 C型肝炎」
フジテレビC型肝炎取材班
小学館　2004 年

臨床検査学科 講師　　北尾　孝司

この本は、フジテレビC型肝炎取材班が、止血剤として使用されたフィブリノーゲン製剤の中に大量のC型肝炎ウイルスが混入していたため、この製剤を投与された患者が、知らないうちに肝硬変や肝がんに進行し苦しんでいるという事実を明らかにしていくというドキュメントである。私はこの本が出版されるのを待ち望んでいた一人である。それは、2002 年の3月だったと記憶しているが、「ニュースＪＡＰＡＮ」の特集でフジテレビC型肝炎取材班が血液製剤によって薬害エイズと同様にC型肝炎ウイルスに汚染していたフィブリノーゲン製剤を点滴により投与され感染させられていた患者が多くいるという事実とその因果関係を明らかにするために遺伝子型で証明したという内容であった。5分間くらいの内容であったがコンパクトに解りやすくまとめられており非常に興味を抱いた。その後の特集はできるだけ観るようにしたが、以前からこの特集が数回にわたって組まれていたことを知り後悔した。その後も新聞等で、血液製剤「フィブリノーゲン」によるC型肝炎についての記事を何度か目にし、その切り抜きを教材としても使用している。この本は、その血液製剤がC型肝炎ウイルスに汚染されていた事実を遺伝子検査により明らかにし、その汚染の原因やその被害者の実態、さらには何故このようなことが起こったのかについて 2001 年4月2日から 2004 年3月 25 日のにかけて合計 36 回に渡り報道したその裏での生々しい取材の様子が書かれてあり、医療職を志す学生には是非一度読んで頂きたい本である。そして、薬害エイズも薬害C型肝炎の問題も過去に医療の現場で米国より輸入して用いられてきた血液製剤がもたらした多大なる被害、その原因はどこにあったのかについて各々が考える機会を持ち、さらに血液感染について再認識して頂きたい。

（きたお　たかし）

学生生活の中での図書館

看護学科２年　正岡　枝里

春の暖かさを感じ始めたこの頃、図書館は今日も多くの人で賑わっている。目当ての文献を探す人、国家試験の勉強に励む人、試験勉強に没頭する人、様々である。本学の図書館は、学外からも多くの方が利用しに来ている。それも豊富な医療関係の資料が揃っているからであろう。医学雑誌や看護雑誌も揃っており、既に現場で活躍している方も多く利用されているようだ。日頃、図書館を利用していてそれを実感する。

本学図書館においては、新刊コーナーも充実しており最新の情報も得ることができる。また、パソコンによる蔵書の検索も可能で大変便利である。自分のほしい情報を収集する方法として、インターネットが情報量が豊富で高速であるという点では利用しやすいのだが、文献はその情報が正確であるという点から、最も信頼できる情報源であるといえるだろう。更に、医療関係のみならず、一般蔵書も揃っており、勉強の息抜きに読むこともあり、それもまた楽しみのひとつである。

しかし、現在の図書館に一つだけ要望がある。それは現在、土日祝日が休館となっているが、せめて土曜日だけでも開館してほしいということだ。実習の合間の週末に調べたいことがある時、課題提出が迫っている時など、切実に感じる。やはり図書館は有意義で貴重な場所！先生方、是非、検討をお願いします！！　（まさおか　えり）

臨床検査学科１年　　谷口　愛

大学生になりレポートを書く機会が増え、その資料を探すために図書館に行くことも増えました。今はインターネットという情報収集の手段もありますが、自分が知りたいと思っている事柄や自分が必要としている情報を、より詳しくより正確に得るために私はまず、図書館を利用しています。この大学は医療系の大学ということで、医療に関する専門書も多く、また蔵書検索のシステムも整っているので、自分が一番必要としている情報を得ることができます。数多くの蔵書の中から自分が求める蔵書を見つけることはとても難しいことですが、蔵書検索のシステムのお陰でいつも自分の求める本を手に取ることが出来ています。また、レポートを書く時だけではなく、講義の際に分からなかったことや興味も持ったことについて調べたり、テスト前に図書館で勉強したり、私だけでなくたくさんの先輩方や友達たちが図書館を利用しています。

私は高校生の時に比べ、図書館を利用する機会が増えました。自分が興味を持って、学びたいと感じた分野の本が図書館にはたくさんあり、図書館の蔵書は自分が知らないたくさんのことを教えてくれます。講義を受けることだけが勉強ではなく、図書館の蔵書を通してもたくさんのことを学んでいきたいと思っています。これからも、図書館をうまくつきあっていきたいと思います。　（たにぐち　あい）

学生生活の中での図書館

短大　第一看護学科３年　佐伯　直美

広くて明るい、それは３年前初めて本学図書館に来た時の印象だった。これまでの学校図書館は、暗くて狭い何やら古くさいところというイメージが強かったため、足が遠のいていた。しかし、ここの図書館は高い天井に大きな窓、緑の植物たちが明るく迎えてくれるためか、いつ見ても学生や外部の人たちに利用されていた。

はじめは、先輩たちが毎日図書館を利用していることを不思議に思った。しかし、それもつかの間で、講義でレポートが出される度に、私も参考文献を探しに図書館へ通うようになった。素早く本を見つけるためにパソコンで蔵書を検索できるので助かった。

一番利用したのは看護研究の時だ。ウェブ検索で国内雑誌文献検索もできるし、最新の本から古い本、使うことがないと思っていた物理や工学の本までも必要な本がほとんど揃っていた。書庫にもないときは購入してもらうこともできるため本当に研究の助けになった。

また、19時まで開館しているため、臨床実習中も実習が終わってから学校に戻って、疾患や検査について調べることができた。

学期末試験や国家試験の勉強の時も図書館は人でいっぱいだった。１人用の机で集中したい人や、友達と大きい机で一緒に勉強したい人など、いろんなタイプの勉強の仕方があるが、１人用から４人用まで机が揃っていて良かったと思う。また、分からないところはすぐに調べることができ、国家試験の問題集や参考書も利用することができる。

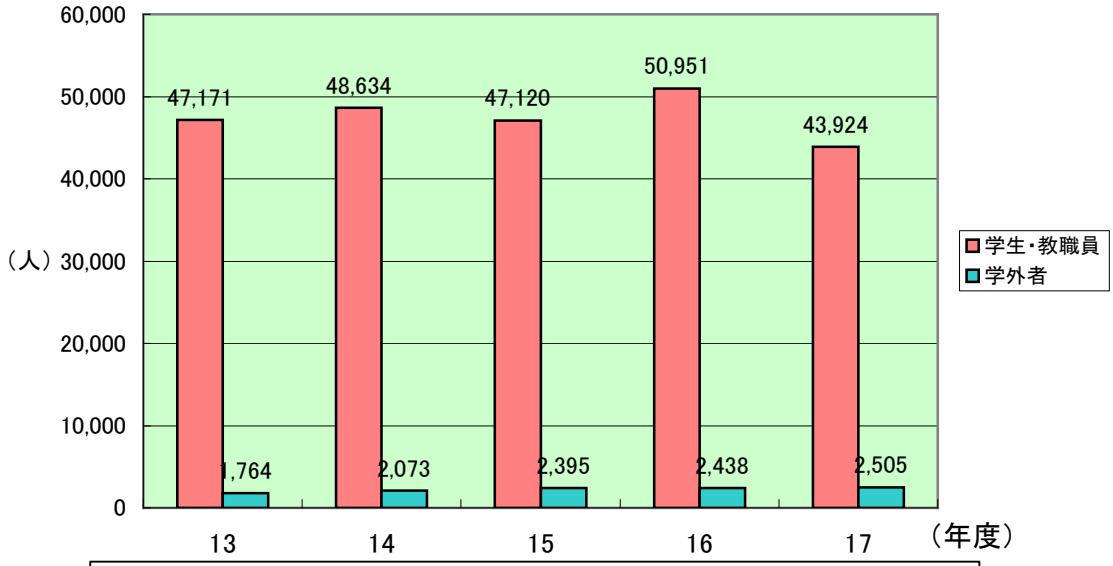
外部の人が図書館を利用している様子を見かけることもあった。卒業して看護師になっても、まだまだ勉強することがあるので、私もきっとこのなじみの図書館に戻って調べものをすると思う。

最後に、とても快適に過ごせる図書館だが、夏はクーラーがとてもよく効いていて寒く感じる学生もいるので、もう少し省エネでお願いしたい。　　（さいき　なおみ）

〈Graphic Report〉

：：：：：：：：：：：：：：：：：：図書館の利用統計 2005：：：：：：：：：：：：：：：：：：

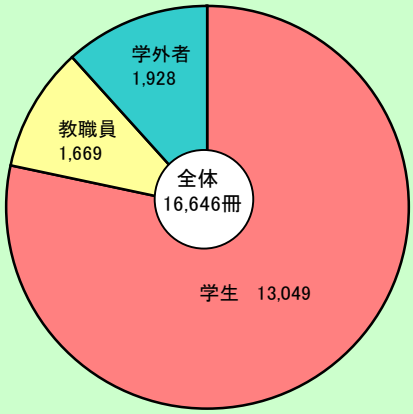
入館者数の推移

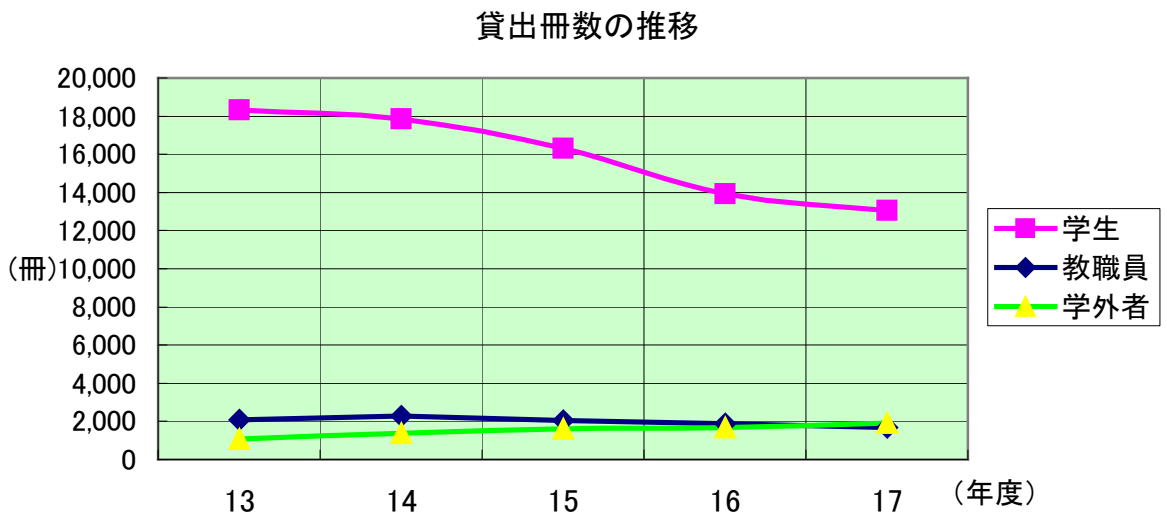


入館者数は、図書館入り口の自動カウンターでとっており、人の出入りがどれくらいあったかが分かるというものである。

学外者については、入館の際カウンターで別に人数をとっているので利用者の実数が出ている。ここ数年は２千人台で緩やかな増加傾向にある。

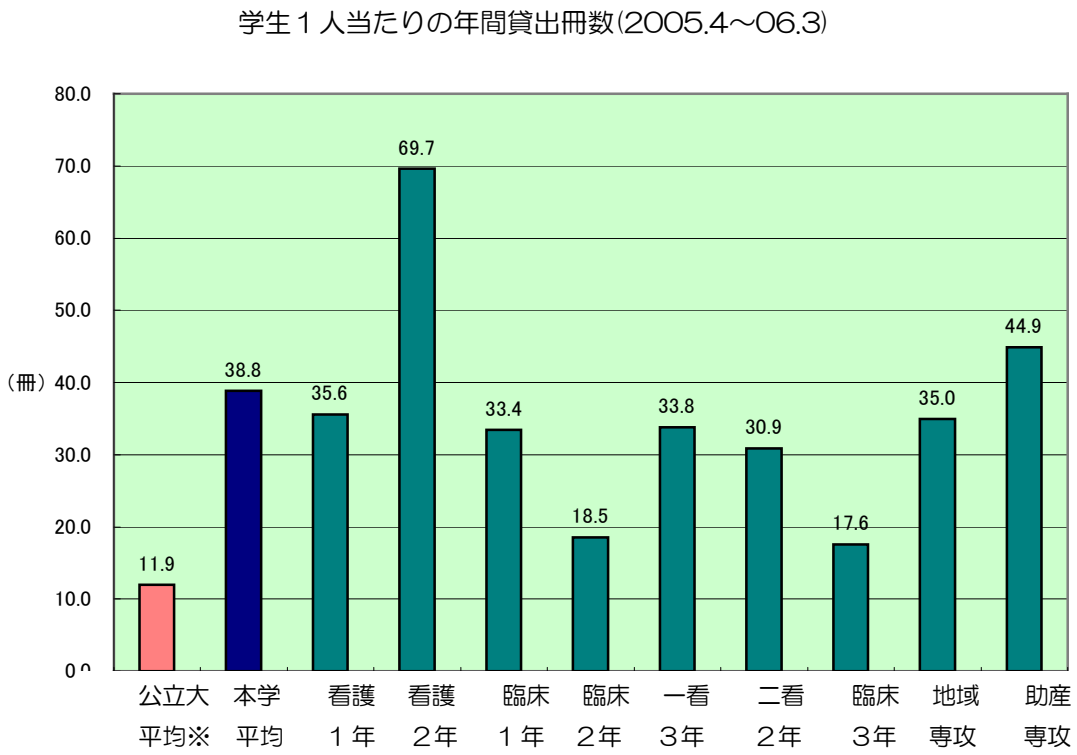
平成17年度貸出冊数（2005.4～06.3）





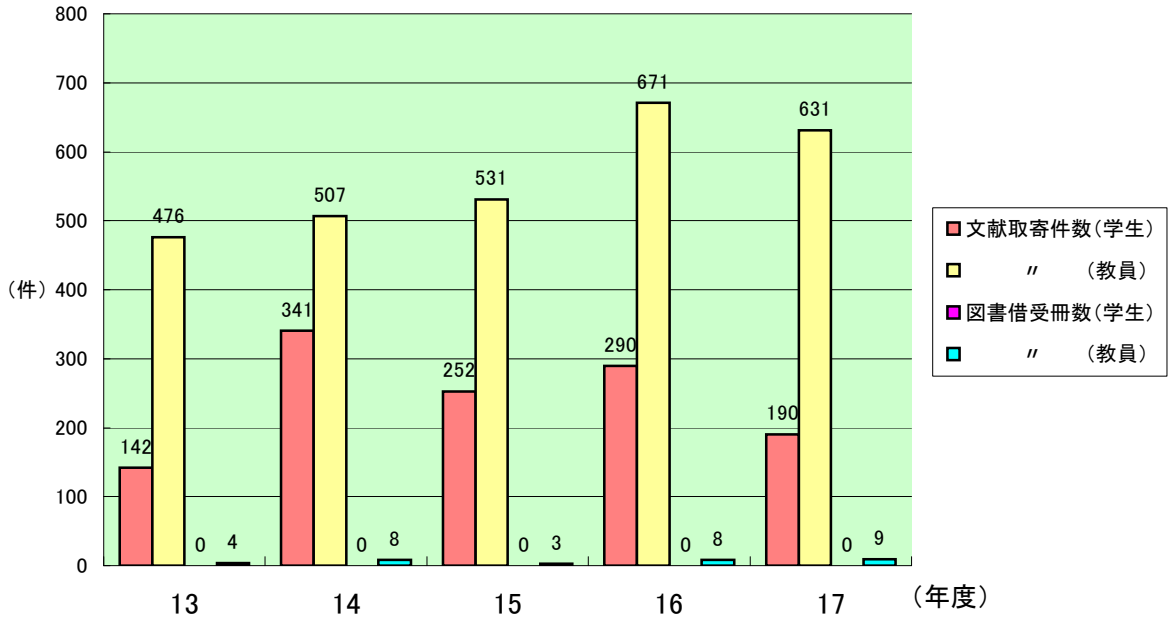
学生への貸出冊数は、平成 12-13 年度の 18,000 冊台をピークに下降している。

学外者への貸出しは毎年少しづつ増加し、平成 17 年度には学内の教職員の冊数を上回った。



※（平成 16 年度）

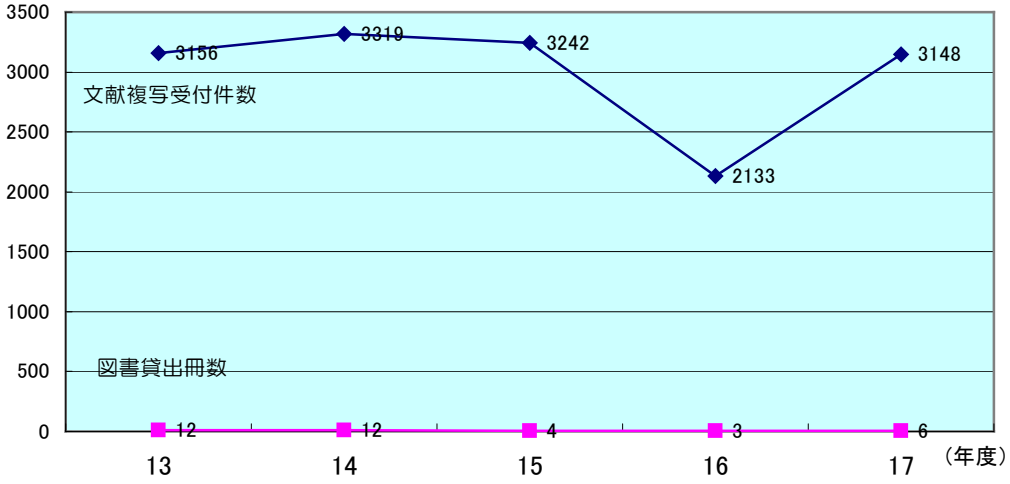
相互利用（依頼編）



相互利用は、他大学図書館等と文献複写や図書現物を提供し合うサービスである。

学生からの文献取り寄せ依頼は年度により増減がある。一方、教員からの依頼は、ほぼ増加の傾向にあるが、平成 17 年度には若干減少した。文献取り寄せへの需要が高まっている背景には、外国雑誌価格の高騰や県予算の減少により、購入雑誌タイトルが減ってきているためと思われる。

相互利用（受付編）



平成 16 年度の 1,000 件の減少は、国立情報学研究所 ILL 文献複写等料金相殺サービス不参加のため利用が減ったと思われる。平成 17 年度から同サービスに参加したことで他学からの申込みが一昨年度並みに回復した。